

長期冒険キャンプに参加した不登校児の体験の意味づけに関する研究

小田 梓・坂本昭裕

Meanings of Long-Term Adventure Camp experience for school non-attendant children.

ODA Azusa¹, SAKAMOTO Akihiro²

【はじめに】

今日の様々な教育問題の一つに、不登校の問題がある。平成20年度学校基本調査速報⁴⁾によると、平成19年度の不登校児童生徒数は12万9千人で、中学校では34人に1人と依然として高い値を示している。また近年の不登校の特徴としては、学校へ行かないことへの心理的負担が薄れている傾向や、発達障害や虐待と不登校の関連、不登校からひきこもりへの関連性が指摘されている⁵⁾。このように現代の不登校問題が多様化、複雑化していることが窺える。

わが国では、これら不登校児童生徒に対する支援の一つとして、キャンプ等の自然体験活動が行われてきた。平成12年の国立青少年センターの調査によると、不登校児童生徒対象の自然体験事業を実施している117機関で、年間1319人の児童生徒が参加したことが明らかになっている³⁾。そして実践と共にその影響を検証する研究も多数行われており、キャンプ前後を比較すると、社会性や自己概念、登校状況などが総じて向上することが報告されている¹⁾。

しかしながら、不登校児へのキャンプの影響を評価する上で、心理的変数等の尺度を用いた質問紙法のみから検討することでは不十分であろうと思われる。なぜならば、不登校児はそれぞれ個別な背景や心理的課題を抱えており、一定の基準からのみでは評価が困難なことが予想される。また、仮に数量的研究で影響が確認されるにせよ、キャンプの「何」が「どのように」

影響したのかというような固有のプロセスを理解するには限界があるからである。したがって、不登校児それぞれを十分に理解するには、坂本ら⁶⁾が指摘するように、個別の体験を詳細に把握する個性記述的な研究の積み重ねが必要であろう。しかしこれまで、キャンプに参加した不登校児の事例研究は少数で、充分とは言えない現状にある。

また、不登校児を対象としたキャンプの治療的な効果を考える上で長期的な影響を捉えることも重要な視点となる。不登校児自身が、自らの生活や考え方の中にキャンプでの体験をいかに意味づけ、予後の社会適応に役立てているかということである。しかし、これまでの研究ではキャンプ後の影響を長期的に追跡したものはなく、登校状況等の変化を概ね1ヶ月から1年程度といった比較的短期間調べるにとどまっている。またキャンプ前後で効果が認められた自己概念等の変数は、数ヶ月後にはキャンプ前の値に戻っていたとの報告もあり^{2) 7)}、キャンプの長期的な影響の有無や、体験をいかに意味づけているのかという内容は明らかになっていない。

従って本研究では、長期冒険キャンプを体験した不登校児の追跡調査を行うことで、彼らが自らの生活や考え方の中にキャンプの体験をいかに意味づけていたかを明らかにすることを目的とする。代表的な事例を検討することにより、その個別のプロセスから考察を行う。

1. 筑波大学体育センター

2. 筑波大学大学院人間総合科学研究科

【方法】

1. 調査対象

平成 X 年度から X+4 年度の 5 年間に、国立の社会教育施設主催で行われた「悩みを抱える中学生を対象とした体験活動推進事業」（以下キャンプ）に参加した不登校児 18 名を対象とした。

2. データ収集

1) 調査内容

- ①「キャンプ後から現在までの状況」として、学校への関心、友人関係、進路への意識、家族関係、等を主な内容とした。質問項目は「キャンプを終えて、その後どうしたいと考えていましたか」「中学卒業後の進路選択に関わる経緯を教えてください」等を設定した。
- ②「自身の生活や考え方に対するキャンプの影響」として、「キャンプの体験がその後の生活や考え方に影響していますか」「キャンプで思い出や印象に残っていることはありますか」等の質問項目を設定した。

2) 面接調査

対象者の自宅または自宅付近にて、本研究者と対象者の 1 対 1 による個人面接を行なった。調査では半構造化面接を実施し、予め設定した調査項目をガイドに流れに応じて柔軟に質問した。面接時間は一人につき 30 分から 70 分であった。面接記録は、対象者の同意が得られた場合 IC レコーダーによる録音を行ない、また筆記による記録を行なった。収集した情報は逐語データとしてまとめた。

3. データ分析

インタビュー調査により得られた内容を個別の事例としてまとめ、詳細に検討することによって、長期冒険キャンプに参加した不登校児のキャンプ体験の意味づけを検討した。なお、分析過程においては適宜、スーパービジョンを受けた。

4. キャンプの概要

キャンプの趣旨は、悩みを抱える中学生（不登校、問題行動等）を対象に長期にわたる生活体験・冒険体験を通して自信や社会性の回復を

図り、日常生活での変容につなげることであった。内容は、メインキャンプ（20 泊前後）では、マウンテンバイクでのグループ走行による移動を基本とし、各所で、富士登山、ロッククライミング、沢登り、リバーカヤック等、冒険的な活動が多く組み込まれていた。また、毎日「ふりかえり」の時間を設け、自己への気づき、他者への気づき等が促された。メインキャンプの他に事前説明会、ポストキャンプ（1~2 泊）が開催され、個別カウンセリングも行われた。

【結果と考察】

18 事例のキャンプ後の状況において、キャンプ 1 ヶ月後の登校率は 18 例中 12 例（67%）で、調査時点（キャンプ後 2~6 年）で安定して登校をし、社会的適応が良好だった者は 18 例中 16 例（89%）であった。

これらを参考に、対象となった 18 事例を、適応の動きとキャンプの影響から便宜的に 4 つのタイプに分けた。タイプ 1 は、キャンプ後、葛藤が少なく比較的順調に適応したもので、キャンプの影響を大きいと感じている 4 事例。タイプ 2 は、キャンプ後、適応への葛藤が大きく適応に苦労したもので、キャンプの影響を大きいと感じている 8 事例。タイプ 3 は、キャンプ後、葛藤が少なく比較的順調に適応したもので、キャンプの影響をあまり感じていない 2 事例。タイプ 4 は、キャンプ後、適応への葛藤が大きく適応に苦労したもので、キャンプの影響をあまり感じていない 4 事例である。ここでは、タイプ 1 とタイプ 2 にあたる代表的な事例を提示する。

タイプ 1 の事例

A 男性

年齢：参加時中学 3 年生、調査時 19 歳（大 1）

A はキャンプ後に、勉強にも意欲的に取り組むようになったという。そして、高校進学に向けて「高校から始まりにしたいって考えてました」と再スタートを切ろうと思っていた。そして、A は全日制の普通高校に入学する。入学当初、多少のとまどいはあったものの、「（高校生活を）すごい楽しめました」という。その理由として、部活動に熱中してそこで友人関係を築けたことを挙げている。そこでの良好な友人関

係がAの適応を支える中心的役割を担っていたようだ。その後もAは高校での順調な適応を続け、そして大学へと進学した。大学生活については「思ったより忙しくて」としつつも、高校で出会った部活動のスポーツのコーチバイトを続けるなど、適応的な生活を送っているようである。

このような適応の過程におけるキャンプの影響についてAは、「それまでは自分の中で、自信っていうものがなかったんですけど。(キャンプが) 終わった2、3年はこれがほんと1番の自信でした。・・大変なことができたんだから、(もし) なんか問題があっても、大丈夫これとできる」と語っている。このようにキャンプで得た自信がその後の支えとなっていた様子が伺える。また、キャンプで印象深かったことについて「(キャンプを) 始めた時はそこまで仲良くなれるわけないって思っていたけれど、あれだけの時間一緒に居たことで、最後は仲良くなれたっていうのが、嬉しかったですね」とキャンプでの仲間との体験を取り上げている。そして、「キャンプ前からどうにかしなきゃなっていうのはあったんですけど・・なかなか出来なくて、で、(キャンプに) 背中を押してもらったって感じですかね、(キャンプの) おかげで気合い入りました」とキャンプ体験と適応の過程を意味づけていた。

考察

Aに対するキャンプの治療的効果を考えたとき、それは本人も語っているように、大きな「自信」を得たことがその中心となっていたと考えられる。中学での勉強の遅れ、不登校による適応の失敗は、Aの自尊心を傷つけ自信を喪失させるような体験となっていたのだろう。このような状況にあったAが、20日間の長期にわたる「冒険」をやり遂げた。このことは、その後のAを支えるに十分な「自信」となったのではないだろうか。これはキャンプが冒険キャンプであったこと、つまり自己の限界にせまるような体験を含む冒険プログラムで構成されていたからこそなし得た治療的効果であるとも考えられる。そしてキャンプのことを振り返り「キャンプの体験が自分の適応への背中を押してくれた」という意味づけをするに至っている。この

ことは、キャンプが直後の変化に役立っただけでなく、Aの中で価値ある物としてあり続ける可能性を示すものであるように考えられる。

タイプ2の事例

B 女性

年齢：参加時中学3年生、調査時18歳(高3)

Bはキャンプ直後に登校への意欲が湧いたことを語り、そして新たに中学校外にある中間教室に通いはじめた。その後Bは不登校を対象とした全日制の私立高校に進学する。高校入学後は戸惑いが大きく、高校1年の2学期から再び不登校になってしまった。その後も欠席を多く重ね不安定な状況が続く。それでもなんとか留年をせずに高校3年生に進級する。高3からは毎日通い始める。その理由について、尊敬できる友だちの存在、自分がやれば出来ると気づいた事を語った。また高校3年生からの変化は、その後の進路について明確な見通しが持てたことも大きかった。「改めて考えてキャンプインストラクターになりたいと思って。今は行く専門学校も決めてます」と具体的な将来展望を述べた。このように思ったのは、自分が参加したキャンプのインストラクターに対する強い憧れがあったからだという。そして学校への登校や学業だけではなく、積極的に課外活動にも取り組むようになった。

キャンプについてBは、「影響力絶大ですね、あれがなかったら今の私がないです」と語った。また「(キャンプを終えて) 強くなった。キャンプで出来たんだから(他のことも) 出来るだろうなって」とキャンプでの自信がその後の支えとなっていることや、「ありのままにいた方が疲れないし、本当にそう気づけた自分もいるし」と、飾らない在りのままの自分でいることの大切さを語っている。キャンプで印象深かったことは、キャンプでの仲間のことを挙げた。そして最後に「人生の転機でしたね。変われよって言われてるチャンスだった。絶対に参加しないとイケないものだったと思う。宝物ですね」とキャンプを意味づけていた。

考察

中学1年生から始まったBの不登校は、高校入学後も2年間引き続く非常に長い道のりで

あった。この間 B は「なぜ学校にいかなければいけないのか」、「自分は何をやりたいの」と問い続け、「自分とは何者なのか」というアイデンティティの動揺の中にいたと考えられる。学校に行く意味を見出せずに不安定な登校状況が続けたり、家の外では飾りたてて本来の自分ではない自分を演出したりと、悪戦苦闘の日々を送っていたのだろう。その動揺に一筋の光を見出したのが、まず「ありのままの自分」を受け入れることであったように考える。この自分自身を認める作業は、アイデンティティ獲得の過程で重要なことである。また、B のアイデンティティの動揺を収束させるのに大きな役割を果たしたのが、キャンプインストラクターという自分の将来の見通しを立てたことだった。本人もその影響力が絶大だったと語るように、B にとってキャンプが与えた影響は非常に大きなものだったのであろう。そしてその背景には、キャンプで出会ったスタッフへの強い憧れ、陽性転移とも捉えられる感情の存在が考えられる。B のように、キャンプそのものにアイデンティティを見出し、それを適応への糧としているような場合は非常に特殊な事例であると考えられる。ただ、少なくとも B にとっては、キャンプが人生における一つのターニングポイントになるような重要な意義を果たしたと考えられる。

【まとめ】

本研究の事例から、不登校児がキャンプから得たもっとも大きなものが「自信」の回復であったと考えられる。そしてその自信が、彼らの社会適応にも大きく影響していたことが明らかになった。キャンプでの体験において、彼らの自信に最も影響したと考えられるのは、自己の限界にせまる体験とそれを乗り越えた達成感であろう。自然を舞台として行われる冒険的活動は、不登校児を自己の身体と心に向き合わせるを得ない状況に立たせた。そして、自分の弱さと葛藤しながらもそれを乗り越えることによって、それまで低迷していた自己意識が回復し、自信を獲得するに至ったと考えられる。

また、不登校児の社会適応におけるキャンプの影響は、キャンプ直後の動きといった比較的短期的な影響と長期的に渡るものがあることが

明らかになった。長期冒険キャンプの達成感から得た自信や自己意識の変化は、直後の時点においてかなり大きなものであったことが推測される。このようなキャンプの体験は、登校というハードルを飛び越えるための踏み切り板のような役割を果たしたと考えられる。また、長期的な視野から見ると、本事例で示されたとおり、キャンプ後数年たっても、キャンプ体験に対する有意義な意味づけをしている者が数多くいた。これは、キャンプの肯定的な影響が長期に渡ること示すものではないだろうか。先にも述べた通り、これまでの数量的な研究では、キャンプによる自己意識等の向上は長期間維持されていない^{2) 7)}。しかし、数値には表れないものとして、不登校児が日常生活や自らの生き方・考え方の中に、キャンプ体験を意味あるものとして意味づけること自体が、キャンプの効果が長期的に保持されることを示すものだと考える。

【引用文献】

- 1) 堀出知里 (2005) : 通年型冒険キャンププログラムが不登校児の心理・社会的変化に及ぼす影響, 筑波大学大学院体育科学研究科博士論文.
- 2) 飯田稔, 中野友博 (1992) : 登校拒否中学生の不安と自己概念に及ぼすキャンプの効果について, 筑波大学運動学研究, 8, 69-79.
- 3) 国立オリンピック記念青少年総合センター (1999) : 自然体験事業への参加経験が不登校児童に与える影響に関する研究, 国立オリンピック記念青少年総合センター.
- 4) 文部科学省 (2008) : 平成 20 年度学校基本調査速報.
- 5) 文部科学省, 不登校問題に関する調査研究協力者会議 (2003) : 今後の不登校への対応の在り方について (報告).
- 6) 坂本昭裕, 渡邊仁, 高橋 茉生, 小田 梓 (2007) : キャンプ療法における不登校児の内的体験の変化-内的体験の変化をもたらす援助要因の検討-, 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 42, 1-12.
- 7) 渡邊仁, 井村仁, 多田聡 (2008) : 悩みを抱

える青少年のキャンプ参加における自己概念の変化, 悩みを抱える青少年を対象とした自然体験プログラムの心理臨床学的効果に関する研究, 平成 16-19 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書, 9-14.

付記

本研究は、文部科学省「悩みを抱える青少年を対象とした体験活動推進事業」の一環として国立の青少年教育施設が主催したキャンプを対象とさせていただきました。研究を快く受け入れてくださった施設の方々、そして参加者のみなさまに、心より感謝申し上げます。